

研究分野	増養殖技術	部名	磯根資源部
研究課題名	日本海多機能藻場造成技術開発調査		
予算区分	国補（県1/2）		
試験研究実施年度・研究期間	H.16～H.17		
担当	佐藤 康子		
協力・分担関係	漁港漁場整備課、鱒ヶ沢水産事務所、深浦町		

〈目的〉

ホンダワラ類藻場の漁業生産効果を把握し、漁港、海岸施設と連携した藻場造成手法について検討する。

〈試験研究方法〉

(1) 天然藻場の機能調査

深浦町岩崎地先のホンダワラ類藻場に平成16年4月に2m四方の観察区を設け、以降平成18年3月まで毎月そこに生育するホンダワラ類の全長、主枝数、主枝の長さを記録すると共に、群落中のサザエ、ウニなどの底棲性水産動物、着生するエゴノリ、モヅクなど有用藻類、蟄集する魚類の種と個体数を目視観察した。

(2) 選択的藻場造成試験

平成16年4月～平成17年3月の各月に、岩崎漁港防波堤沖側の直立した壁面に生育する海藻を幅50cm、深さ50cmごとに採取し、以降平成18年3月まで毎月海藻採取面に入植する海藻を目視観察した。

平成17年3月に岩崎漁港東側の第2離岸堤地先砂浜域の水深3m、4m、5m地点に各々4基ずつコンクリート製方塊ブロック（縦1.5m×横1.5m×高さ1.0m）を設置した。6月に生殖器床を持つヨレモク及びジョロモク主枝各24kgを12個の網袋に2kgずつ分けて入れた後、各水深の方塊ブロックに種ごとに4個ずつスポアバッグを設置した。平成17年10月に各方塊ブロック上面に生育する海藻を枠取り採取した。

〈結果の概要・要約〉

(1) 天然藻場の機能調査

調査期間を通じて観察区内にはヨレモク、マメタワラ、ジョロモク、ヤツマタモク、トゲモク、アカモク、フシスジモクの7種類のホンダワラ類が生育し、ヨレモクが80.1%、マメタワラが16.9%を占めた。ヨレモクは調査開始時11.3個体/m²の密度で生育していたが、平成17年11月には50.8個体/m²に増加した。2歳以上のヨレモクの体長は、調査開始時平均94.4cmであったがその後減少し、平成16年8月には28.1cmとなった。翌年の平成17年3月には95.8cmで最大となったが、8月には27.9cmで最小となった。生殖器床は4月から6月に観察された。

底棲性水産動物は、サザエが最も多く観察され（最大1.3個体/m²）、次いでマナマコ（同1.0個体/m²）、エゾアワビ（同0.5個体/m²）、キタムラサキウニ（同0.3個体/m²）の順であった。有用藻類は、平成16年7月及び平成18年5～7月にエゴノリが着生した。魚類は、4月～6月にウスメバル、ウミタナゴ、クジメ、マガレイ、カジカ（種不明）、ギンポが、7月～9月にはクサフグ、ウミタナゴ、ササノハベラ、マアジ、キュウセン、クロダイ、イシダイ、クジメ、カジカ（種不明）、メバル、リュウグウハゼ、マダイ、ギンポが、10月～1月にはウミタナゴ、キュウセン、クサフグ、クロダイ、クジメ、カジカ（種不明）が観察された。また、12月にはハタハタが観察され、ヨレモク、マメタワラ、ジョロモク、トゲモクにハタハタ卵塊が認められた。1月にはハタハタ卵塊のごく一部から仔魚が孵出するのが観察され、2月には孵出痕が大半を占めた。3月には藻場内にハタハタ稚魚が多数観察された。

以上から、磯根資源にとって周年藻場が重要な役割を果たしていることが確認された。

